慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	官話教科書『華語萃編』の成立に関する一考察
Sub Title	A study of the compilation of Mandarin Chinese textbook "Kago suihen"
Author	松田, かの子(Matsuda, Kanoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2001
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.80, (2001. 6) ,p.178(191)- 194(175)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00800001-0194

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

官話教科書『華語萃編』の成立に関する一考察

松田　かの子

A study of the compilation of mandarin Chinese textbook “Kago suihen”

はじめに

東亜同文書院は，1898（明治31）年「支那保全」をスローガンに文化と教育の提携を図ることを目的として成立した，当時最大の対アジア機関東亜同文会の教育事業の一環として，1901（明治34）年上海に開設された。中国を富強にし，中・日の人材を養成することによって東亜同文会のスローガン「支那保全」を実現しようというのが開設の趣旨であり，1920（大正９）年から14年間は中華学生部を設け中国人学生の教育にもあたった。日本人学生については全国の府県から奨学生を募り，開校当初の修業年限は３年（大正10より４年修業），卒業に際しては中国内地の調査旅行が課せられた。同院は1921（大正10）年専門学校令による指定学校となり，1939（昭和14）年大学へ昇格したが，1945（昭和20）年敗戦に伴い廃校となった。

東亜同文書院では独自の方法により中国語が教育されたことはよく知られるが，これまで中国語教育の見地から同院を研究したものは極めて少なく，その実態はほとんど明らかにされて来なかった。本論文では，東亜同文書院が発行した官話教科書『華語萃編』の成立を中心に，同院の中国語教育の特質を考察する。

なお，一部地名等については今日の良識の水準から判断して使用が不適切なものも含まれるが，歴史用語としてそのまま使用することにする。

1　東亜同文書院における中国語教育

1．1　東亜同文書院の開校

東亜同文書院は1901（明治34）年上海に開校した。もとは1900（明治33）年南京に南京同文書院として開校されていたものが，義和団事件の余波をさけて上海に移転し，東亜同文書院と改称されたことに始まる。開学当初学科は政治・商務の２科が設置され，修業年限は共に３年であった。1914（大正３）年には農工科が新設されたが財政難から1922（大正11）年19期生の卒業を待って廃止，政治科もまた1921（大正10）年18期生の卒業を待って廃止され，以降は商務科のみになった。修業年限は1921（大正10）年入学の21期生より４年となり，同年７月専門学校令による指定学校となった。（但，それ以前から書院側は高等商業学校及び高等学校と同水準の教育を目指していた。）1939（昭和14）年からは大学へ昇格したが，1945（昭和20）年敗戦にともない廃校となった。東亜同文書院は1901年の開校以来廃校まで，戦火を逃れるための移転を繰り返しつつも，一貫して上海に在り続けた。

1．2　中国語教育の形態

東亜同文書院では，学生に倫理・中国語・英語・地理学・法学・政治学・経済学等を教授したが，中でも中国語の教育に重点を置いていた。開学より大学昇格までの全期にわたって，全学科課程のほぼ１/３～１/４である週10時間前後が「支那語」及び「支那時文及尺讀」で占められており[1]，中国語が重要視されていたことがわかる。同院の経営・教育内容・施設設備は創立から10数年を経て漸く整えられ，1917（大正６）年より始まる徐家淮虹橋路校舎時代の20年間は，同院の最盛期といえるが，この頃には，支那語の授業では学年を二組に分け，日本人教師と中国人教師が２人１組で教えるという形態が定着していたようだ[2]。一年生の場合中国人教師は教科書を読むだけで，二年生になると中国人教師が大体講義し，それを日本人教師が訳すというように授業が行われた。

この時期，東亜同文書院の教授・講師陣により『華語萃編』という官話教科書が編纂された。初集から四集まで全四冊あり，初集が1916（大正5）年，二集が1924（大正13）年[3]，三集が1925（大正14）年，四集が1933（昭和8）年に刊行された。これらは，初集は第一学年用，二集は第二学年用というように同院の中国語教程に合わせて編纂されており，同院以外の中国語教育機関で用いられた形跡は見当たらない。

1915（大正4）年入学の15期生鈴木擇郎の回想[4]によると，『華語萃編』初集は，まだ出版前の15期生第一学年から使用された。第一学年終了時には二集・三集がまだ出版されていなかったため，二年次では『官話指南』を，三年次では『談論新篇』を使用したという。『官話指南』・『談論新篇』は，当時中国語学習者の間では相当普及していたと見られる中級教科書で，同様に敗戦まで広く用いられた初級教科書，宮島大八『官話急就編』と併せて学習されることが多かったようだ。これらの教科書を用いていたにも拘わらず，教授・講師陣が二集三集と『華語萃編』の編纂を進めていった理由は何だろうか。

次章では『官話指南』・『談論新篇』と『華語萃編』二集・三集を比較することによって，『華語萃編』がどのように成立し，どのような性質を持っていたのかについて考察する。

2　『華語萃編』の編纂と『官話指南』・『談論新篇』

2.1　各書の概要

比較に入る前に，まず各書を概観しておく。

『官話指南』は，呉啓太・鄭永邦によって著され，1881（明治14）年初版が発行された。鱒沢1997によると，本書の初版は上海で印刷・刊行されたが，日本国内で普及したのは1903（明治36）年以降文求堂書店より発行された改訂版である（以下，本論文における『官話指南』とは改訂版を指す）。改訂に当たったのは『談論新篇』の著者でもある金国璞で，改訂初版発行以降，1938（昭和13）年までの35年間で35版が出ている。本書では問答形式の情形会話全100章を，「應酬瑣談」「官商吐属」「使令通話」「官

話問答」の四巻に分けている。

『談論新篇』は，金国璞・平岩道知によって著され，1898（明治31）年発行された。本書の初版は善隣書院から発行されており[5]，文求堂書店より発行されたのは訂正2版以降と考えられる。正式な書名は『北京官話 談論新篇』（以下『談論新篇』と記す）であり，1924（大正13）年に改訂版の『官話 談論新篇』が出版された[6]。初版発行より1941（昭和16）年までの43年間のうちに25版が出ている。本書では書名の「談論」という名の通り，ある話題について二人が対話形式で語り合う談論形式をとった課文が100章設定されている。内容は，社会・思想・商工業など多岐にわたっている。

次に，成立当初の『華語萃編』はどのようなものであったか，以下各集ごとに内容を見てみる。

【初集】

1916（大正5）年初版発行。第一学年用の教科書として編纂された。巻頭に音節表と「聲音編」を付し，次に基本句を用いた「散語問答」8課，更にその後問答形式の情形会話が54課設定してある。巻末には附録として名詞集を付している。大正元年8月に起稿したが翌2年原稿の一部を焼失，大正3年6月に完成した。

【二集】

1924（大正13）年初版発行。第二学年用教科書として編纂された。初集の後を受けて主にやや複雑な交際用語を集め，それらを「應酬用語」「使令通話」「俗尚瑣談」「接見問答」の4編に分類している。これら4編の下にそれぞれ問答形式の情形会話が設定されており，併せて57課ある。この二集では「語學習得の旁ら略中國の風習禮儀の一端を知悉せし」むことを目的としている。

【三集】

1925（大正14）年初版発行。第三学年用教科書として編纂された。二集と同様に問答形式の情形会話から成っている。全体を上下2編に分け，上編には商業に関するもの50課を，下編には農工業に関するもの18課を配してある。この三集では「努めて實際の應用に便に」することに主眼が置か

れている。「錢業」「銀行」「代辦」等の課には「語言學習の旁ら（中略）中國の商業慣習を了解せしめ」るために所定の図表を付している。大正10年秋に起稿し，大正14年３月脱稿。

【四集】

1933（昭和８）年初版発行。第四学年用教科書として編纂された。一・二・三集の後を受けて「文化・教育・農工・商・市俗の高級なる會話の熟練」を目的とした。問答形式の情形会話のほか，公開席上での挨拶や講演なども挿入されている。

東亜同文書院では，1901（明治34）年の開校当初は初級教科書として御幡雅文『華語跬歩』を用いていたが，これが『華語萃編』初集の刊行まで続けて用いられたかは定かではない。また『華語萃編』は全四冊が同時刊行されたわけではないため，1915（大正４）年当時初集を終えた第一学年は二集・三集が完成するまで『官話指南』・『談論新篇』を使用した。1921（大正10）年から４ヶ年修業が始まって以降，四集が完成するまでの第四学年が用いた教科書も現在のところ不明である。

２．２　『華語萃編』と『官話指南』・『談論新篇』との比較

本章では，『華語萃編』二集・三集と『官話指南』・『談論新篇』を構成・内容の点から比較する(7)。

２．２．１　構成の比較

まず，各教科書の構成について見てみる。各書とも，全編を通してある情形設定や話題に沿って登場人物が対話する問答・談論形式がとられている。書式も共通しており，意味や文章の区切れに読点［，］が，話し手が交代するところで句点［。］が用いられている。

設定されている情形・話題については，『官話指南』・『談論新篇』が一冊のうちに挨拶用語や生活会話から社会・風俗・政治・商工業にわたる内容までを含んでいるのに対し，『華語萃編』では二集と三集で扱うものが明確に分かれている。二集では日常生活・社会・風俗・政治を扱い，三集では商業・農工業に関するものを扱う。特に三集では銀行や為替取引で用

いられる所定の図表を挿入し，学習の便を図っている。第二学年で「語學習得の旁ら略中國の風習禮儀の一端を知悉」し，第三学年で「實際の應用」に役立てるという明確な目標段階を設定した上で，二年三年と継続して学習することが念頭におかれた内容構成である。

構成上で目を惹くのは，『華語萃編』二集は『官話指南』の形式を踏襲しているということである。下記の【例１】を見てみよう。

【例１】

『華語萃編』二集　全４編57課			『官話指南』　全４巻100章		
第一編	應酬用語	20課	第一巻	應酬瑣談	20章
第二編	使令通話	15課	第二巻	官商吐属	40章
第三編	俗尚瑣談	10課	第三巻	使令通話	20章
第四編	接見問答	12課	第四巻	官話問答	20章

以上のように『華語萃編』二集の全体を４編に分ける形式は，『官話指南』の形式を踏襲したものである。しかし内容の共通性はほとんどない。『官話指南』第二巻「官商吐属」は主に商業に関する会話，第四巻「官話問答」は官吏の会話を扱った部分であるが，『華語萃編』二集においては削除されている。

２．２．２　内容の比較

次に，内容の比較に入る。『官話指南』・『談論新篇』は清王朝末期の中国情勢を反映している。課文には，阿片戦争後の商業習慣の変化や変法運動を扱ったものもあるが，既に当時の実情にはそぐわなくなっていただろう語彙や表現が多く含まれている。下記の【例２】はその一例である。句読点は原文のまま，下線は筆者によるものである[8]。

【例２】[9]

請問老兄貴<u>科分</u>。我是辛酉科得<u>舉人</u>。<u>會試</u>是那科呢。<u>會試</u>是壬戌科。

〈『官話指南』第二巻 官商吐属　第五章（抄）〉

（前略）起初他本是由勞績保舉了一個小京官、後來加捐郎中、分在戶部學習行走、當了兩年差、又中了舉人了、然後又由別的勞績上、保的是以本部郎中候補、大概再過個兩三年、總可以補缺了、這麼著他又一會試、恰巧中了、…（後略）〈『談論新篇』第三十章（抄）〉

【例２】には，下線部の通り共通して科挙に関する語彙や表現が含まれているが，科挙は1905（光緒31／明治38）年に廃止されている。科挙以外にも王朝時代の官制を反映した語彙が見られる。一方，『華語萃編』は伝統的な風俗・習慣と併せて，西洋から入って来た新たな生活様式や民国期の「新思想」を反映した話題を多く扱っている。例えば二集第三編「俗尚瑣談」第七～十課「改革家庭」では，「新思想」の発展により従来の結婚観・家庭観に変革が加えられようとしていることが語られている。同じく第四編「接見問答」においては「初會教長」「再訪文人」「初會主筆」等の話題が設定され，政治体制について語り合い中国の将来を案じるような場面も見られる。また三集上編商業類第四課～第十八課の金融機関に関する章では，従来からある票荘・銀號に触れると共に新たな銀行制度について解説している。また海上保険・火災保険等も新たな話題である。

しかし，それら課文の内容がすべて東亜同文書院によるオリジナルというわけではない。『華語萃編』三集は，その話題を多く『談論新篇』に取材している。以下に挙げる【例３】は，A『華語萃編』三集 B『談論新篇』からの引用である。句読点は原文のまま，下線は筆者によるものである。

【例３】A[10]

貴書院外國語的功課以甚麼爲主要科啊。敝書院的功課、是英文和華語並重。(1)教英文的先生是那國的人。是英國先生。英文實在是當務之急、所有亞細亞各地方兒總是英國話當先、不但貿易場中都是用英國話、就是各國的官員們彼此交談、或是書信往來、都是以英國語言文字爲主。您說這話誠

然、我們學的是商業、更要人人兒得會英文。是是、您剛纔不是說還有華語一門功課麼。不錯、那也是我們主要的功課。那麼教華語的先生、是貴國人哪、還是敝國人呢。是貴國先生。(2)是了、我聽見說貴國東京商科大學、和外國語學校、都有華語科、請的也是敝國先生、另外私立的華語研究所也很多的、是眞有的事情麼。不錯、是實有其事、現在貴國各高等學校裡、設東文專科的也不少了、這算是兩國的知識交換哪。誠然誠然、本來偺們兩國、同文同種、情如兄弟、總要分外的親密、纔能彀想法子保全東亞大局哪、(3)再說兩國往來交際的、第一是得彼此通曉語言、是最要緊的、若是語言不通、不但兩國的政治風俗、不能盡知、就連朋友們交接往來、彼此的情意、也不免有些隔膜。您說的很是、若是語言不通、彼此既不能各道其意、那兩下裡的情意、可又從何聯起呢。是的、像那官場中的事情、雖說是當中有人繙譯、可以各表各的意思、究竟和彼此能覿面交談、總差着點兒勢、再說彼此文理既不能通曉、那一切政治、又怎麼能體察的明白呢、若再遇見關系重大的事情、更得彼此在一塊兒密商了、竟靠著那繙譯、雖然事體的情形、彼此心裡頭也能了然了、然而其中有那細微的地方兒、萬一有點兒詞不達意、可就不免弄出錯兒來了、總而言之、語言文理、於偺們兩國官商的交際、是最有關系的事情。聽您這番議論、是眞透澈極了、佩服佩服。〈『華語萃編』三集 上編商業類 第一課 華英併重（全文）〉

B-1

閣下這一向用甚麼功哪。我現在是在一個書院裏、學英國話哪。先生是英國人、是美國人。是英國先生。閣下學英國話、實在是當務之急、所有亞細亞各地方兒、總是英國話當先、不但貿易場中都是用英國話、就是各國官員們彼此往來交際、或當面交談、或筆墨往來、都是以英國話爲主、若是不懂得英國話、和各國官商往來辦事情、總是不免掣肘的。您說這話誠然、…（後略）〈『談論新篇』第一章（抄）〉

B-2

我聽見說、貴國北京同文館、近來添設日本國話學堂、是眞有的事情麼。不錯、是實有其事、從去年秋天、添設貴國語言館、名曰東語館、也是和別國語言館規模是一樣。…（中略）是了、我還聽見說貴國別的省、近來也有設

立敝國語言學堂的。不錯、我也聽見說、是廣東和湖北兩省設立東語學堂了、也請了貴國的教習了。我們敝國東京高等商業學校和外國語學校、都有漢語科、請的也是貴國教習、另外還有我們敝國讀書人、自已私立的漢語學房。如今偺們兩國彼此互相習學語言、十數年之後、兩國人才輩出、從此邦交自然更親密了。誠然誠然。〈『談論新篇』第二章（抄）〉

B-3

在我想兩國往來交際、第一是彼此通曉言語、是最要緊的、若是言語不通、不但兩國的政治風俗不能盡知、就連朋友們交接往來、彼此的情意、終不免有些隔膜、所謂是差之毫釐謬之千里、彼此既不能各道其意、那情誼可又從何聯起呢、雖說是當中有人繙話、可以各表其意、究竟和彼此能覿面交談、總差着點兒勢、再說彼此文理既不通曉、一切政治、又怎麼能體察的明白呢、若再偶然遇見關系重大的事情、更得彼此當面商酌、若經人繙話、雖然事體的情形、彼此心中都了然了、然而其中有那細微的地方兒、總不免畧有隔膜的、這樣兒的情形、只可意會、不可言傳的、総而言之、語言文理、於兩國交際之道、是最有關系的事情。〈『談論新篇』第三章（全文）〉

Aの下線部（1）～（3）は，それぞれB-1～3の破線部と同一であるか非常に似ている。これにより，『華語萃編』三集は『談論新篇』に話題を取材していることがわかる。『華語萃編』三集上編第一課は，『談論新篇』の第一章から第三章を合わせて作成されたのである。そしてこのような現象は，第一課のみに見られることではない。

A下線（1）・（3）とB-1・3は，細かな言い回しを除いてほぼ同じ文章が用いられている。B-3は，一章のほぼ全文がAで用いられている。ただB-3は一人の話し手が全文を話しているのに対し，Aでは文を短く区切って二人の会話にしている。『談論新篇』には，このように一人の話し手が長々と話し続ける文章が多く，ただ一読しただけでは意味が理解できない課文も多い。『華語萃編』三集ではこの点に幾分気が遣われていることがわかる。

A下線（2）とB-2は，日本・中国双方の語学教育機関について述べ

ている点で共通しているが，B-2の冒頭にある“北京同文館”は1862（同治元／文久2）年清朝政府によって北京に設立された官吏の外国語学習機関で，『華語萃編』発行時には既に時代にはそぐわない話題である。同様に“東京高等商業學校”は1918（大正7）年大学令の公布によって“東京商科大學”となった。また清末の学制改革を反映して“學堂”は“高等學校”に変わっている。

2.2.3 考察

明治の前・中期に発行された『官話指南』『談論新篇』の中に描かれている中国は，大正期に入る頃には既に現実にそぐわなくなっていた。大陸より海を隔てた日本においては依然有効だった教科書も，上海で現実を目にする東亜同文書院生にとっては満足できるものではなかっただろう。実際に即し，しかも学校の教程に合致した教科書編纂の必要性が出てきたことは至って自然の要求だったのではなかろうか。

このようにして始まった教科書編纂であるが，本章で見てきたように『華語萃編』は全てが東亜同文書院のオリジナルというわけではない。二集は『官話指南』の構成を踏襲しており，三集の話題は『談論新篇』に取材している。このことから，『華語萃編』は『官話指南』『談論新篇』の基礎の上に成立したものだとすることが出来る。東亜同文書院では授業で『官話指南』『談論新篇』を用いつつも，中国の情勢や時勢に鑑みて，教員が内容の過不足を調整しながら教えていた。その間，教員が知恵を出し合い努力を重ねた成果が一冊の本として結実したものが『華語萃編』だったのではないか(11)。

3 『華語萃編』の改訂と重念符号

3.1 『華語萃編』の改訂

『華語萃編』は発行後数回にわたって改訂がなされている。改訂状況は各集により違いがあり一概には言えないが，筆者の知りうる限りでは少なくとも1925（大正14）年，1930（昭和5）年，1933（昭和8）年の3回にわたって行われている。まず大正14年の改訂は初集のみ行われた。これは

三集の出版に合わせて行われたものだと考えられる。次の昭和5年は初集・二集・三集が大幅に改訂されている[12]。昭和8年の改訂は昭和5年ほど大規模ではないが，文字・字句の訂正が行われいる。これは四集の出版に合わせて行われたものだと考えられる。この他の改訂については現在のところ不明である[13]。

資料が比較的整っている第二集を用いて，具体的な改訂状況を述べてみる。二集は昭和5年の改訂で内容が大幅に変更されている。第四編「接見問答」が全て削除されたほか，1課が削除，6課が追加され，4編57課あった課文は3編50課となった。削除された「接見問答」のうち一部は三集へ移動し，追加された6課のうち5課は初集から移動されたものである。課文の増減以外にも，全編にわたり字句の訂正が行われている。例えば，男性に対する敬称として頻繁に使われていた“老爺”は，召使いが主人を呼ぶ時など，目下から目上に対してのみ用いられるようになった。代わりには“先生”が使われている。また召使いから主人に対する返事の“喳”は“是”へ改められた。北京を指す“京”は“北平”となっている（第一編第一課）。また，二集編纂時に排除し切れなかったと見られる“京官”等の清朝期の語彙は改めて削除されている。

【例4】 我們敝岳是作京官。→ 我們敝岳是在外交部。（第一編第十三課）

以上のほか，昭和5年版になって課文の右端に重念符号［－］が付されるようになった。

昭和8年の改訂では昭和5年ほど大規模な変更はないものの，1課が削除，全編にわたり字句の訂正がなされた。第一編「應酬用語」第十二課「婚家賀禮」を例に改訂状況を追ってみる。下線は筆者によるもの，傍点は重念符号を示している。

【大正13年版】[14]

現在的結婚式、有新舊兩樣兒、新式的是文明結婚、仿照歐美的儀式都是在

公園、或是在大旅館舉行婚禮、不過一輛花馬車、一起兒軍樂隊就行了、這麼辦雖然簡便、可是這個風氣還沒開通、所以還是按照舊式的多、…（後略）

【昭和５年訂正版】

現在的結婚式、有新舊兩樣兒、新式的是一般人所說的那文明結婚、都是在大飯館子、或是在大旅館舉行婚禮、近幾年來、因為也是一種潮流的關系、所以也很盛行的、不過要以全國各地方兒說起來、那總還是按照舊式的多…（後略）

【昭和８年改訂版】

我聽說您貴國的結婚禮有新舊兩樣兒、究竟有什麼差別哪。新式的是一般人所說的那文明結婚、都是在大飯館子、或是在大旅館舉行婚禮、近幾年來、因為也是一種潮流的關系、所以也很盛行的、不過要以全國各地方兒說起來、那總還是按照舊式的多、…（後略）

大正13年版に比べ昭和５年版のほうが，新式の結婚式が「文明結婚」として流行しつつある様が窺え，それでも古来よりの結婚式がまだ多い経緯が丁寧に説明されている。昭和８年版になると，情景会話における発話がより自然に始まっている。

三集の改訂については資料が不揃いであるため詳述は避けることにする。手元にある昭和８年版を見ると，初版に比べ商業会話集的な要素が希薄になっている。初版で見られたような，二集と三集を分野によって分かつことをやめたのかもしれない。また大正14年版に付されていた図式は削除されている。

このように，『華語萃編』が成立後も頻繁に改訂され，手が加えられて行ったのに対し，『官話指南』は1938（昭和13）年第35版まで改訂された形跡はない。『談論新篇』は『華語萃編』二集の初版発行と同じ1924（大正13）年に『官話談論新篇』として改訂版が出ている。この時，２．２．２【例２】に見られたような当時の情勢にそぐわない話題を扱った25章を削除し，その分新たに25章を加え，２章を改訂している。しかしこれは『華

語萃編』に見られるような体系的な改訂ではない。例えば，第九十六章から第九十九章にかけては一括して貨幣と銀行の話題を扱っていたにも拘わらず，そのうち3章は情勢と合わないため削除してしまい，1章のみが前後と何の脈絡もなく取り残されてしまったという現象が見られる。この改訂によって内容は時代と合致したものの，教科書としてのまとまりは損なわれてしまった。

3．2　重念符号と発音教育

3．1で述べたように，第二集には昭和5年版より重念符号が付されている。『華語萃編』における重念とは，いわゆる句重音のことで，文中のある語或いは音節を強く発音することである。強く発音することで，文脈や話者の態度・感情・特殊な意図による強調が表れるなど，文章にニュアンスを添える働きがある。

1．2で述べたように，中国語の授業では中国人教師と日本人教師がペアで臨み，まず初めに中国人教師が教科書を読むのだが，教科書に重念符号が付される以前は，中国人教師が口頭で直接重念を指摘し，指導していたという(15)。東亜同文書院においては発音が非常に重視されており，授業時間外に先輩が後輩の発音指導をする伝統があった。重念もまた発音教育の一環として重視されていたという。1926（昭和元）年入学の26期石田武夫は「この重念の訓練があってこそ，中国語の会話におけるテンポの問題も会得できた」と回想している(16)。大正5年版の教科書からは，強く発音すべき箇所の右端に［－］の記号が付され，二集に関してのみ言えば，以降このスタイルが定着した。

まとめ

『華語萃編』は，全くのオリジナルというわけではないが，東亜同文書院の中国語教授・講師陣が当時の中国情勢に鑑みて編纂したものであり，また同院の中国語教程に合わせてあるため，教科書として体系的に整備されている。成立後も数回にわたって改訂が行われ，中国情勢と教学上の必

要性に併せて常にその姿を変え続けた『華語萃編』は，決して魚返1958の言う「ただ素材としての会話を漢字で記録した教科書」[17]の範疇を脱してはいない。しかし当時の教科書としては，これ程素早く忠実に中国を反映していた教科書は稀であり，学習者にとっては内容・形態ともに非常に新しい物だったといえるのではないだろうか。この編纂の背後には，眼前の中国情勢の変化を具に観察しようとする，同院の中国研究全体に対する姿勢があり，それこそが同院の独自性といえるだろう。

注

（1） 東亜文化研究所1983『東亜同文会史』霞山会 P335-336，松岡恭一・山口昇編1908『沿革史 日清貿易研究所東亜同文書院』東亜同文書院学友会 P52・54・56，上海東亜同文書院1930『創立三十周年記念東亜同文書院誌』P76

（2） 愛知大学五十年史編纂委員会1998『大陸に生きて』風媒社，石田武夫1990「同文書院における中国語教育の独自性」『滬友』58滬友会 P43-46

（3） 六角恒広氏は1992『中国語教本類集成』解題及び1994『中国語書誌』において，1925（大正14）年発行としているが，1961・1934・1939『華語萃編』二集の奥付及び凡例から1924（大正13）年発行とするほうが適切と判断した。

（4） 愛知大学五十年史編纂委員会前掲書

（5） 金国璞・平岩道知著1898『北京官話談論新編』初版善隣書院（国立国会図書館蔵）

（6） 『官話談論新篇』第九十一章に“請問中國維新，到現在多少年了。若打戊戌變政説，不倒三十年，若細想起來有五六十年了。”とあり，また第百章に“自民國成立到如今十幾年了”とあることから，改訂版出版は1924年と推察される。六角恒広編1991『中国語教本類集成』第一集解題には，「この教科書は，その後改訂され『官話談論新篇』と改題し，四六版で文求堂から発行されている」とだけ記されており，発行年代は示されていなかった。これについて，『中国語書誌』では触れられていない。

（7） 比較するにあたり用いたテキストは以下の通り。東亜同文書院編1925『華語萃編』二集再版本[7]東亜同文書院，東亜同文書院編1925『華語萃編』三集初版本東亜同文書院，鄭永邦・呉啓太著金国璞

改訂1918『官話指南』13版文求堂書店，金国璞・平岩道知著1917『北京官話談論新篇』11版文求堂書店

（8） 本論文における中国語の引用部分について，原文は全て縦書きである。以下，全てこれに準ずる。

（9） 日本語訳は以下の通り。句読点は原文に従う。（官話指南）お尋ねしますがあなたが科挙に合格したお年は。私は辛酉年の挙人です。会試はいつですか。戊戌年です。（談論新篇）初め彼はある功績から北京の官吏に推薦されたのですが，その後また金で官位を買って郎中になり，戸部へ見習いにやられ，２年ほど勤めたところ，また挙人に及第しました，その後また別の功績で，本来所属していた部の郎中候補となり，大体２，３年も経てば，欠員の官に任命されるのですが，そのような時にまた会試に及第し…

(10) 紙幅の都合により，Ａの下線部にのみ日本語訳を付す。なお句読点は原文に従う。（１）英語の先生はどこの国の人ですか。英国人です。英語は実に当面の急務です，アジアのあらゆる所で英語が第一に必要で，商業社会で用いるだけでなく，各国の官吏が互いに交際するにも，手紙をやりとりするにも，みな英語を主にしています。（２）そうですか，聞くところによるとあなたの国の東京商科大学や，外国語学校には，みな中国語科があり，先生も我が国の人で，他にも私立の中国語研究所が多いということですが，本当ですか。間違いありません，本当です，今ではあなたの国の高等学校でも日本語科を置いている所が多く，これは両国の知識交換といえますね。（３）また両国が往来交際をする上では，まず第一に言葉が通じることが，最も重要です，もし言葉が通じなければ，両国の政治風俗がわからないのみならず，友人たちと交わるにしても，互いの気持ちに溝が出来てしまいます。その通りです，もし言葉が通じず，互いに気持ちを表せなかったら，双方の気持ちはどこから繋がるのですか。そうです，官界の事のように，いくら通訳がいて，各々の気持ちは表せるといっても，結局直接話ができるのよりは，少し劣ってしまいます，また双方の文章が分からないとなると，すべての政治を，どうして詳しく調べて明らかにすることができましょう，さらにまた関係が大いにあることに行き当たったら，互いに密かに相談をせねばならず，そのような時通訳に頼ったならば，事の大勢は互いにわかるにしても，細かい点に至っては，少しの語が通じないだけで，間違いが生じてしまいます，つまるところ，言葉と文章は，我々両国が交際する上で，もっとも重要なことであります。

(11) 愛知大学五十年史編纂委員会前掲書中の鈴木擇郎の回想によると，『華

語萃編』二集発行以前，既に完成していた原稿が仮刷りされて教学で用いられていたという。この例に限らず，東亜同文書院では新たな課文を作成してはプリントして授業が行われていたのかも知れない。

(12) 三集に関しては，昭和5年版は筆者未見。しかし下段で述べるように，昭和5年の改訂で二集から削除された第四編の一部が，三集昭和8年版中に見えることから，三集は二集と同時に改訂された可能性が極めて高い。

(13) 初集の改訂については，今泉潤太郎1995「東亜同文書院における中国語教学—華語萃編を中心に」『愛知大学国際問題研究所紀要』103p1-25に詳しい。

(14) 日本語訳は以下の通り。句読点は原文に従う。(大正13年) 現在の結婚式には，新旧ふた通りがあり，新式は洋式結婚式で，欧米の式をまねて公園か，あるいは大きな旅館で式を挙げます，飾り馬車一台と，軍楽隊があれば済むので，簡便ではありますが，このような風習はまだ開けていないので，やはり旧式に則るものが多く…(昭和5年) 現在の結婚式は，新旧ふた通りがあり，新式は人が言うところの洋式結婚式で，大きな料理屋や，大きな旅館で式を挙げます，ここ数年は，時代の趨勢から，盛んに行われています，しかし全国的には，やはり旧式に則ったものが多く…(昭和8年) 聞く所によるとあなたの国の結婚式には新旧ふた通りあるそうですが，どのような違いがあるのですか。新式は…(以下昭和5年版に同じ。)

(15) 石田前掲論文。『華語萃編』における重念符号については，このほか石田武夫1987『中国語学管見』東方書店に詳しく記載がある。

(16) 同上より引用

(17) 魚返善雄1958「三十三年華語夢」『書報』極東書店5月

参考文献・資料（注に掲げたものは除く）

坂本一郎　1958「中国語学習の体験」『中國語学』71中国語学研究会 p6-12

鱒沢彰夫　1997「『官話指南』，そして商務印書館の日中合弁解消」『中国文学研究』23早稲田大学中国文学会 p46-62

六角恒広　1994『中国語書誌』不二出版

同上　1988『中国語教育史の研究』東方書店

清水董三　1921『東亜同文書院創立二十周年根津院長還暦祝賀記念誌』東亜同文書院同窓会

上海東亜同文書院大学　1940『創立四十周年東亜同文書院記念誌』

大学史編纂委員会編　1955・1980『東亜同文書院大学史』滬友会

波多野太郎編　1988『中国文学語学資料集成』第二篇　不二出版

六角恒広編　1991『中国語教本類集成』第一集一巻・四巻　不二出版
同上　1992『中国語教本類集成』第二集二巻　不二出版

本論文で使用した教科書

東亜同文書院編『華語萃編』二集　2/6/7/10版 東亜同文書院 1925/1961/1934/1939（6版は1961年滬友会より復刻されたもの）
同上『華語萃編』三集　初/（8年改訂初版より）4版 東亜同文書院　1925/1939
鄭永邦・呉啓太著　金国璞改訂『官話指南』2/8/13/35版 文求堂書店 1905/1911/1918/1938
金国璞・平岩道知著『北京官話談論新篇』初/4/11版　文求堂書店　1898/1905/1917（初版のみ善隣書院）
同上『官話談論新篇』17/25版　文求堂書店　1932/1941